

教育を 読む

河合文化教育研究所
主任研究員 丹羽健夫

この本は主婦の眼で、あの漱石の日常をさらけ出しているのだから、面白くないわけではない。まず興味深いのは、財布を預かる立場からみた漱石の収入である。漱石は1893(明治26)年27歳で東京帝国大学英文科を卒業、東京高等師範学校(現筑波大学)で教鞭をとった後、1895(明治28)年伊予松山中学校に赴任する。『坊っちゃん』の舞台である。そのときの収入が月給80円、年収にすると960円である。翌1896(明治29)年第五高等学校(現熊本大学)の教壇に立つ。月給100円。この年に本書の語り手である鏡子と結婚する。鏡子が言うには100円とはいっても、何やかや引かれて手取りは70円くらいだったそうである。今と同じだ。

4年後の1900(明治33)年文部省留学生として、ロンドン大学に派遣される。官からの学資は年1800円、家へは休職月給として25円が支給される。しかしこの留学時代、漱石は金も時間も無駄だとして大学には行かず、本を大量に買って下宿でひたすら読んだという。鏡子には生涯で一番勉強したのはこのときだと伝えている。「あまりに勉強が過ぎ

たのでしょう。ひどく頭を悪くした様子でありました。・・(文部省に)白紙の報告書を送ったとかいうことです。・・(文部省には)夏目がロンドンで発狂したということがわかっていたそうです」いやはや今でいうノイローゼのはじまり、当時のことばの神経衰弱というものであろう。

やがて帰国、1903(明治36)年一高教授(現東京大学教養学部)と、小泉八雲のあとを受けた東京大学文学部英文科講師を兼務する。年俸は一高700円、東大800円、明治大360円、合計1860円。8年前の松山中の約2倍である。

しかし勤務は一高が週20時間、東大が6時間、それに明治大を加えると週約30時間という、今の予備校の人気講師顔負けの獅子奮迅ぶりである。しかもこの多忙の中で『我輩は猫である』(1905(明治38)年)、『草枕』(1906(明治39)年)、『二百十日』(1906(明治39)年)などの今に残る名作をものにしていく。やはり超人といわねばなるまい。

そして1907(明治40)年一切の教職を辞して朝日新聞社に招かれ作家として入社する。月給200円。

◀『漱石の思い出』
夏目鏡子述・松岡譲筆録
(文春文庫)
定価 本体676円+税



12年前の松山中の2.5倍である。このほかに印税が入る。朝日入社後『虞美人草』『文鳥』『夢十夜』などのヒット作品を次々に世に出す。このように快進撃を続ける夫の姿の周辺を鏡子は淡々と語る。

夏目が25歳頃徴兵忌避のため北海道に一時籍を移したこと(北海道は兵役がなかったとみえる)。泥棒に入られたこと(どういふものか夏目家は泥棒によく入られている)。総理大臣の西園寺公望からの雅宴への招待を『時鳥 廁半ばに出かねたり』の葉書一枚で断ったこと。文部省から博士号をやるといわれたとき「・・小生は今日までただの夏目なにがしとして世を渡って参りましたし、これから先もやはりただの夏目なにがしで暮らしたい希望を持っております」と断るなどいかにも漱石らしい挿話がキラ星のように登場する素敵な本である。

また「こんなことなら原稿をとっておけばよかった」という夫人の独白が入るような暢気な本である。騙されたと思って読んでみて損のない本である。